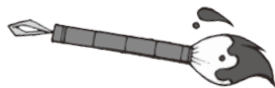


## 新・下野市風土記

## 華麗なる一族 外伝2



下野市教育委員会 文化財課

今回は、『平家物語』の中に出てくる白河天皇の悩みの種であった「天下三不如意」の山法師や、彼らが行った神木動座について記しました。今回は、その続きです。

## 続・平安時代のデモ行進

興福寺を出発して京に向かった一団は、出発までと同様、いくつかのやりとりを経ながら進んでいきます。

いきなり入京するのではなく、途中、洛外の宇治平等院に入り、改めて交渉を行います。交渉が結実すれば、ここで引き返すわけですが、またまた交渉が決裂すると、神木を神輿に載せた大集団が入京します。

それでも、この集団はいきなり御所には向かいません。左京三条にある「勸学院」に向かいます。

勸学院とは、官僚になるための大学寮の学生寄宿舎で、後には、ここに在籍すると任官試験を受けずに地方官に任命される特権（年挙）が、朝廷から認められました。また、成績優秀者には奨学金が支払われ、中央省庁へ登用されました。この施設の維持管理の権限は藤氏長者にあり、財政は藤原一門から支出されていました。

このように藤原一族と非常に縁が深く、藤原氏の氏寺である興福寺、氏神である春日大社に関する事務を司っていた機構であったため、勸学院が、神木が一度安置され、交渉が行われる場となったのです。

勸学院での交渉も決裂した場合、いよいよ神木が御所に運び込まれ、最終要求交渉が行われます。これが決裂してしまうと、興福寺衆徒や春日大社神人は、神木を洛中に残したまま引き揚げてしまいます。

この行為を、「振り棄て」といいます。神木

を置いていかれた朝廷側は、御神体だけに神罰を恐れたため、神木が入洛中は、公卿・上級官僚は外出を禁じられて蟄居状態となります。特に藤原一門と縁のある者はこの取り決めが厳しく、違反すると一門から追放処分を受けました。

当時の政権の中枢部は藤原一門が占めていたことから、この期間中、朝廷での会議は行われず、政治機能は停止してしまいました。

当時は、都と朝廷を護るため、検非違使や滝口の衛士、北面の武士などの公的護衛集団が組織されていました。しかし、神木動座の一団に対して武力を行使すると、その公的護衛集団に対する死罪や流罪などを求める要求が上乘せされる結果となったため、手出しをすることができませんでした。

このような諸々の事情から、院政期から鎌倉期にかけての興福寺側からの大抵の要求・要望は受け入れられたようです。

さらに面白いのは、要求・要望が承認されて神木が京都から奈良に帰る「神木帰座」の際には、藤原一門の中枢人物たちが、神木を洛外まで見送りに行ったことです。場合によっては、奈良まで随行し、春日大社に参詣したようです。それほど、藤原一門にとって興福寺と春日大社は重要な社寺だったのです。

しかし、南北朝期になると、政権が藤原氏から足利將軍家に移ります。藤原一門に属さない足利氏に対しては、興福寺の神木動座は効力を持ち得なくなり、やがて消滅しました。

## 古麻呂の子孫？

藤原氏が政治の根幹に君臨し、藤原氏以外の優秀な人材は政治の中枢から疎外されていた平安時代も、下毛野を名乗る人たちが活躍したことが、史料に残されています。

古麻呂が偉大過ぎたため後継者が震んでしまっていますが、古麻呂の子に相当する年齢

の人物の名前を『続日本紀』で確認することができます。

史料によると、天平15（743）年の5月に、下毛野朝臣稻麻呂という人物が、従六位上から貴族階級の位である外従五位下に昇進し、さらに五年後には従五位下へと昇進しています。